



市立病院だより

ほほえみ

発行 越谷市立病院
 発行人 院長 丸木 親
 編集 院内情報誌編集委員会
 連絡先 〒343-8577
 越谷市東越谷10-32
 電話 048-965-2221(代)
 F A X 048-965-3019
 発行月 令和4年(2022年)4月
 (No.51)

災害時連携病院の指定を受けて

地域総合診療研究講座医師

唐津 進輔

様々な業種の方々の尽力により、令和4年1月から当院は、『災害時連携病院』に指定されました。

災害時連携病院制度は、多数の負傷者が発生する首都直下型地震などの大規模災害に備え、災害拠点病院を支援する目的で令和4年1月から設置された、埼玉県独自の制度です。

県全体では10か所の医療機関が指定され、当院を含む県東部地域では東埼玉総合病院、白岡中央総合病院が指定されています。

具体的な役割は、「1災害拠点病院と連携を図りながら、中等症患者や容態の安定した重症患者の受け入れ」、「2県内で活動する災害派遣医療チームの派遣【埼玉地域DMAT】」です。

災害拠点病院、災害時連携病院の関係は、新型コロナウイルス感染症が流行している現在において、大学病院と市中病院との関係を考えてイメージしやすいと思います。

大学病院では、人工心肺装置(エクモ)を含めた高度な医療を行うことができます。

一方で、市中病院では、酸素投与や人工呼吸器管理は可能ですが、行える医療に限りがあります。

新型コロナウイルス感染症の患者さんが重症化した場合、まずは高度な医療を行うことが出来る大学病院へ搬送され、人工心肺装置等の治療を行います。

通常であれば状態が改善し、退院するまで入院することができます。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行下では、次の重症患者さんの治療に備えて、病床を確保する必要があるため退院はできなくとも状態がある程度安定した時点で市中病院への転院搬送を行います。

大学病院というと『高度』で『派手』な治療のイメージがありますが、市中病院のサポートなしでは必要な患者さんを診ることができません。まさに市中病院は『縁の下の力持ち』と言えます。

「新型コロナウイルス感染症」を「越谷市で大規模災害が起きた場合」に置き換えますと、大学病院は獨協医科大学埼玉医療センター、市中病院は当院にあたります。

災害時連携病院に指定されてからまだ日は浅いですが、令和4年4月から災害対策委員会を設置し、災害マニュアルの作成や定期的な災害訓練を行う予定です。

これからも災害時における地域の『縁の下の力持ち』になるべく努めてまいりますので、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



D M A Tにおける

業務調整員の役割

リハビリテーション科

たかやま ゆうたろう

高山 裕太郎

私は普段、理学療法士としてリハビリテーション業務に従事しており、災害とはあまり関係のないところで働いています。

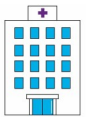
そのような環境下で災害に興味を持つようになったきっかけは、地元熊本が地震や水害で被災したことでした。

災害が起きたとき何らかの形で被災地の支援をしたいと思うようになり、災害のことをいろいろ調べていく中で、医療従事者として被災地に貢献するためには、D M A T 隊員になればよいことを知りました。

当院にて埼玉地域D M A T 指定を目指すこととなったため、D M A T 業務調整員を志願しました。

業務調整員の職種は問われません。薬剤師や放射線技師、検査技師、事務職など、病院によってさまざまな職種の方が業務調整員を担当されています。

では、業務調整員の役割について説明します。



D M A T が活動する時には、医療チームとしての医療活動のみならず、被災地までのアクセスに関する情報収集、被災地の医療ニーズの把握、関係機関（自治体・消防・自衛隊など）との連携のための連絡調整、D M A T チームの生活環境整備や飲食物の確保など多くの作業が必要となります。

それらを担当するのが業務調整員です。医療活動に必要な、適切な環境を調整・提供し、有効な医療支援活動へ繋げるためには必要不可欠な役割です。D M A T 1 チームにつき、1〜2名います。

業務調整員に必要な心構えとして「機敏・機転・気配り」の3点が挙げられています。限られた時間での対応が求められるため、「機敏」に動くことが必要で、携行した限られた資源（人物）で対応しなければならぬため、「機転」をきかせた活動が必要です。

また、災害現場という被災者、救済者ともに厳しい環境を考えれば、被災者に対しては当然ながら、チームメンバー、被災地内の災害対応者、他の救済チームなどにも「気配り」ができることが求められます。

D M A T の活動は普段とはまったく違う状況下となるため、非常に戸惑うことも多いと思います。

これから訓練を重ねながら知識や技術を身につけて、少しでも理想の業務調整員になれるように頑張っていきたいと思えます。

◆ D M A T とは？ ◆



「災害派遣医療チーム」の英語の頭文字 (Disaster Medical Assistance Team) を略してD M A T と呼ばれ、大規模な災害や事故などの発生時に、被災地へ迅速に駆けつけ救急治療を行うための専門的な訓練を受けた医療チームです。

1 チームにつき医師1名、看護師2名、業務調整員1名の計4名で編成することを標準としています。

業務として、災害現場や被災地内での「1 現場活動」、「2 域内搬送」、「3 病院支援」、「4 広域医療搬送」、「5 支援・調整」があり、活動に必要な通信手段、移動手段、医薬品のほか医療用資機材、生活手段等を自ら確保しながら継続した活動を行います。

埼玉県内の状況としては、令和4年1月現在、県内22の災害拠点病院に埼玉D M A T が46隊所属しています。

また、県内10の災害時連携病院に埼玉地域D M A T が10隊所属しており、越谷市立病院は災害時連携病院の指定を受けています。

D M A T 隊員となつて

6-1 病棟看護師

おかむら まさや
岡村 雅也

令和4年1月から、当院が災害時連携病院として指定され、D M A T を持つことになりました。

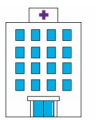
当院は埼玉地域D M A T としての機能を持つことになり、私はD M A T 隊員(看護師)を希望し、この度、選出されました。

災害時連携病院の指定前に埼玉県が主催するD M A T 隊員養成の研修を受講し、改めてD M A T が災害発生時などのような機能を有し、効果を出すことが出来るのか認識しました。

私が看護師を志したのは、助けを求め人の役に立つことがしたいという思いから、患者さんの一番近くにいる看護師になりたいと思つたからでした。

しかし、誰かのために何かをしなればならないときには、そのための知識や技術が必要であることを何度も痛感しました。

当院の救急外来で勤務をしていたときには、自身の未熟さに何度もはがゆさを感じることが多かったことを記憶しています。



自分が出来ることを増やしたいという思いから、J P T E C (病院前外傷教育プログラム)を受講したり、二次救命のインストラクターを経験して、知識・技術を増やしてきました。

今回D M A T の研修で一番記憶に残っているのは、看護師でも医師と同等の知識が求められます。

大規模災害現場や事故現場では、患者さんや家族がパニックをおこしていることが多く、エリアストレスは上昇傾向にあります。

そのようなときでも看護師は、冷静に状況判断し、患者の病態を観察・アセスメントして医師へ伝えることが求められます。

また、被災した患者さんの処置などの看護ケアも重要になってきます。

そのため、看護師にも医師と同等の知識が必要であり、高い看護スキルが求められます。

そして、災害現場では医療資機材が十分ではないことも想定されます。緊急で処置が必要な場合でも、現場にある医療資機材を用いて患者さんに処置をしなければなりません。

当院のD M A T は発足したばかりですので、経験も未熟ですが、災害時に役に立ちたいと考えている人ばかりです。

私もその一人ですが、日ごろから多くの症例に関わり、訓練などを繰り返し、自身の知識や技術を磨いていきたいと思つています。災害時にチームとして、そして看護師として最大限の力が発揮出来るように日々精進していききたいと思つています。

編集後記

院内情報誌編纂委員長

おばざわ はなこ
尾羽澤 英子

今年は2月まで雪が降って、かなり寒い冬でしたね。

今からはすっかり春を楽しみましょう。コロナのため、自粛生活ですっかり体力が落ちてしまった人！

沢山いるのではないですか？

気温も暖かくなり、春風が気持ちよい日はぜひ、感染対策をしつつ外へ出て、新しい季節の到来を楽しんでください。